



早春の山の妖精「カタクリ」

2024年4月2日



昨年は春の訪れも早く、春の妖精に出会えませんでしたので、今年こそはと3月下旬より何度か足を運び、ついに念願の妖精に出会えました。



春の妖精こと「カタクリ」です。

カタクリは10～15cm程度の背丈が低い植物ですので、落葉樹林（夏緑樹林）の木々が葉をつける前のこの時期（早春）、光をたくさん浴びて（光合成をして）花を咲かせ、虫を呼び寄せ種を作ります。この短い期間（1～2週間程度）の隙間を使って子孫を残す、という一種の生存戦略なんですよ。（高校の生物の教科書にも載っています。）

薄紫色の花が下を向いてうつむき加減に咲いている姿が、恋する乙女にも見え、とても愛らしいです。また、先がけて花を咲かせ、まわりがすっかり緑になる季節には姿を消してしまう植物のことを、ヨーロッパでは「スプリング・エフェメラル（春の儂いもの）」と呼んでいるそうで、カタクリはまさに春の妖精です。参考 去年の校長ブログ「カタクリ」

早春の阿南の花「シデコブシ」

2024年4月3日

サクラの花が咲くこの時期、モクレンやコブシの花にもよく似た淡い紅色の花が咲いています。



モクレンやコブシと同じ仲間でもある「シデコブシ」です。

このシデコブシ、東海地域（愛知、岐阜、三重県）

の一部では自生しており、日本固有種で絶滅危惧種（絶滅危惧Ⅱ類）でもあるそうです。さすがにこちらの「シデコブシ」は自生ではなく、多分庭木として高校に植えられたものだと思います。



真っ白なコブシの花にかなり似ていますが、こちらは淡い紅色の花で花弁が多く、その様がしめ縄や玉串に飾る紙（四手または幣）に例えて「シデコブシ」と

名付けられたようです。昔の人は想像力が豊かですね・・・

（写真は阿南町富草のR151号線沿いの津島神社）



コブシとの違いは花だけでなく、樹の樹高も大きく違います。コブシは10mを超えるものもあるくらい高木で、この時期花が咲くと、遠くからでもかなりよく目立ちます。一方シデコブシはせいぜい4～5mほどの低木（または小高木）ですが、花は薄いピンク色で花びらが多いので華やかですね。コブシ、シデコブシの果実は色や形がとても特徴的で、独特な実をつけます。また秋に紹介したいと思います。お楽しみに。

早春の白い花「ハクモクレン」と

「コブシ」花びらがふっくら、開ききらないのが「ハクモクレン」。

「コブシ」は花びらが少なく（6枚）、完全に開いています。



里山の春を彩る「ミツバツツジ」

2024年4月16日

ツツジの中でも開花も早く、サクラが満開から終わる頃の4月中旬、里山の春を彩ります。名前の由来ともなっていますが、枝先に3枚ずつ葉がつく、鮮やかな赤みを帯びた紫色の花が咲くツツジの仲間です。



山地や丘陵のやせた尾根や岩場で自生しているものを時々見かけます。写真のミツバツツジも、

自宅（飯田市川路）から阿南までの通勤路のR151号線沿いで見かけたものなのです。また、この時季、園芸種としてのミツバツツジも、庭木としてところどころでよく見かけます。

ミツバツツジ類には多くの種類（類縁種や雑種）があるそうで、庭木でよく見るミツバツツジは微妙に花の色が異なっていたり、花の着き具合も自生のものに比べても花つきがよく豪華なものもありますね。おしべの数も異なるそうです。（自生している本種は5本です。）



ミツバツツジは飯田市の市花となっており、昭和



52年の市制40周年記念に制定されたそうです。確かに、天竜峡の川岸の岩場で咲くミツバツツジが、この時季とてもきれいです。

ウワミズザクラ（上溝桜）

2024年4月24日

桜の季節も終わる頃、白いブラシのような花を咲かせる樹木が里山のところどころで見かけます。ウワミズザクラ（上溝桜）です。



サクラと名前がついていますが、花だけ見ると、とても桜の仲間には見えません。どうやら、葉が桜に似ているところが名前の由来のようです。（確かに似てますね。同じで「バラ科」の仲間でした。）

樹高はかなり高い落葉の高木で、大きいものは10m～20mにもなり、やはり学校までの通勤途中の車の窓からも、この花が咲く時季よく目立ち確認できます。

一つ一つは小さい花ですが、穂状に一斉に咲かせ、長いおしべがふさふさした動物の尾っぽのようにも見え、中々可愛らしい花です。（牧内には、理科の実験で使った試験管を洗う、試験管ブラシにも見えます。（笑））



夏から秋には赤黒い小さい実をつけ、果実酒として利用されてきたそうです。

ハナイカダ（花筏）

2024年4月24日



一見すると見落としがちで、見た目も「これが花？」「葉っぱに花が咲くの？」と思いますが、ちょっと珍しい植物の「ハナイカダ」です。

葉の中央に小さな花をつける様が、葉の筏（いかだ）に花の船頭が乗っているように見えることから、ハナイカダと呼ばれています。それにしても、風流なネーミングですね。

ハナイカダですが雌雄異株で、オスの木とメスの木があり、受粉すると葉の中央に実をつけ（昨年5月の写真）、夏から秋には真っ黒に熟した実になりま

す。ふつう、雄株の雄花は複数（3～5つ）の花が、雌株の雌花は1～2つの花が咲くそうです。

（昨年5月に撮影した若い実と、6月に撮影した黒く熟した実）



こんな小さな花ですが、ミツがあるのかアリが花に寄っ



てきています。ハナイカダにとってもありがたい、アリが受粉を手伝ってくれていますね。写真を撮っていると、白黒モノトーンの面白い紋様の昆虫がいました。

（近いうちにブログで紹介します。）

オオツクバネウツギ（大衝羽根空木）

2024年4月26日

枝の先に二輪ずつ、ややクリーム色でラッパ状の花が、垂れ下がって咲いています。



阿南町の大下条（阿南町役場の北側の裏山）で見つけました。

以前紹介したスイカズラと同じようにクリーム色で二輪ずつ咲くところは似ていますが、ツルでなく樹に咲いている花だし、、、と、その場では何の花かわかりませんでしたので、写真に収めて後から調べました。

どうやら「オオツクバネウツギ」（大衝羽根空木）のようです。花の付け根の萼片（がく片）が正月に行う羽子板の羽＝衝羽根（つくばね）に似ているところが名の由来のようです。確かに似ていますね。



近い仲間に「ツクバネウツギ」があるようですが、見分け方はツクバネ（衝羽根）の違い。ツクバネウツギは同サイズのもので5枚、オオツクバネウツギも5枚ですが1枚だけ小さいとのこと。また、開花時期もちょっと異なり、オオツクバネウツギはツクバネウツギより2週間ほど早いそうで、これからの5月にツクバネウツギが咲き始めるようです。

写真の衝羽根（花の付け根の萼片）を見ると、1枚だけ小さいことがわかります。そうするとこの花はオオツクバネウツギですね。



テーブルツリー「ミズキ（水木）」

2024年5月9日

今この季節（GW明け）、山地や里山の所々で、階段状（水平）に枝を広げ、ややクリーム色した白い小さな花をたくさん咲かせている樹木が見られます。



ミズキ（水木）です。樹高は5mから10mくらいもある大きな樹で、テ

ーブル状に何層も広がって白い花を咲かせるため、遠くからもとてもよく目立ちます。名前の由来は、根から水を吸い上げる力が強く、春先に枝を切ると水のような樹液が滴るところから「水木」と命名されたそうです。

ミズキの材は白くきめが細かく削りやすいため、コケシやコマによく使われているそうです。毎日通っているR151から見える里山ですが、国道沿いの川路や三穂下瀬ではミズキほとんど見られないのですが、下條をの陽阜（ひさわ）辺りから数多く見られます。（阿南高校周辺でも見られます。）何か理由がありそうで調べてみたら面白そうですね。



余談ですが、みなさんは街路樹によく植っている「ハハナミズキ」はご存知ですね。桜が終わった頃、白色やピンク色の花が咲く樹です。ちなみにあのハナミズキはミズキの近縁種でアメリカが原産の樹木です。花のサイズは全然違うけど、似てますね。

白蝶のような「ヤブデマリ（藪手毬）」

2024年5月13日



阿南町の富草、R151号線沿いの沢にちょっと入った林内で、アジサイに似た白い花が咲いてました。藪に生えていて、手鞠のような花を咲かせることから「ヤブデマリ（藪手毬）」

と呼ばれています。

確かにうっそうとした藪の中で見つけましたが、花はちょっと手鞠のように見えませんね。ただ、この季節、庭木でよく見かける白く大きな鞠状の花の「オオデマリ（オオデマリ）」はこのヤブデマリの変種だ

そうです。そう言われれば、葉の形もかなり似ているし、テマリの名も納得ですね。

花びら（花弁）のように見える部分は、実はガク片で、装飾花と呼ばれています。実際の花の部分は真ん中の小さな小さな星形の粒のような花が本当の“花”になります。以前（R5年の校長ブログ）紹介した「タマアジサイ」や「ノリウツギ」と同じタイプの花です。これらは同じ仲間のアジサイ科アジサイ属ですが、今回のヤブデマリは“ガマズミ科ガマズミ属”で、花の形状は似てますが全く異なる仲間です。しかも樹高も意外と高く、大きいものは5～6mぐらいにもなるそうです。

花（花弁）に見える白い部分をよく見ると、5つに裂けて水平開いてますが、何故か一つだけ極端に小さいです。そういえば、ちょっと前に紹介したオオツクバネウツギも一つだけ小さかったですね。何か意味があるのかなぁ・・・？



悲恋の物語「テイカカズラ（定家葛）」

2024年5月22日

花びらは5枚で、スクリューや風車のような特徴的な形をした、2～3cmぐらいの白く可愛い花が咲いています。まわりの木々に絡まるつる植



物の「テイカカズラ」です。

『テイカカズラ』（定家葛）の花の名称は、「新古今和歌集」や「小倉百人一首」の撰者で有名な藤原定家の恋のエピソード（伝説）に因んで付けられたそうです。定家は鎌倉時代初期の歌人で、法皇の娘（式子内親王）に身分違いの恋をします。その恋は叶うことはなく、彼女を思うあまり、この世を去った定家がカズラに生まれ変わって彼女の墓に絡みついたといわれています。

花は香りも甘く、華やかな香りも楽しめます。ただ、毒性もあるそうなので、テイカカズラに触ったら手を洗ってください。